

気球船



第 214 号

平成19年10月
文部科学省
初等中等教育局
国際教育課
編集・発行
初版発行昭和62年12月

海外子女教育総合HP: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm

世界の窓

夢広がるカンポリンポの丘 ～ 創立40周年を迎えて～

サンパウロ日本人学校
校長 志佐 光正

はじめに

ブラジルの輝く青空を背景にブーゲンビリアの炎のような赤が目にしみるようです。校長室から椰子の木の向こうに見える集会広場は、何事もなかったかのように静かに時が流れています。目を閉じますと9月22日、創立40周年記念カンポリンポ祭の賑やかな光景が、昨日のこのように目の前に浮かんできます

記念カンポリンポ祭 < 午後の部 > MATSURI
「わっしょい。わっしょい。おみこし わっしょい。」カンポリンポの丘に元気な声が響きわたりました。青いはっぴにまめしぼりの小学部1・2年生46人が手作りおみこしを担いで入場し、MATSURI をテーマとした午後の部の始まりです。会場に集まった400人の人たちから一斉に拍手が起こり、おまつり会場は一気に盛り上がりました。



広場には、児童・生徒の創意を生かしたお店が8つ、保護者有志のお店が6つ、学校職員のお店などが広場を取り囲むように並んでいます。児童・生徒のお店は、学校で収穫したコーヒー豆を使ったコーヒーのお店、学校の草花を使ったミニ盆栽、ブラジルの果物を使ったジュースのお店など学校の環境を生かし、ブラジルについて学んだこと取り入れたユニークなお店がそろいました。保護者有志のみなさんによる手作りのお店には、かき氷、アイスクリーム、手作りお菓子、チョコバナナ、ポップコーン、飲み物が並んでいます。教職員のお店では、学校で収穫したコーヒー、焼き芋、ヨーヨー釣りを用意しました。どのお店も大盛況、子どもも大人も参加している全員の顔に笑顔があふれていました。特別に設置した舞台の上では、児童・生徒会が中心になって企画したクイズやゲーム、子供たちによる得意技の披露、そして大抽選会が行われ、おまつりを大いに盛り上げてくれました。



おまつり広場のすぐ隣の図書館前の坂道では、学校にある竹を使った長さ約40メートルにもなる「流しそうめん」が行われました。初めての体験だという人が多く、流れてくるそうめんをすくおうとあちらこちらで歓声があがっていました。あれもこれもと回っているうちに午後の3時間はあっという間に終わってしまいました。名残惜しそうに家路につく子どもたちは、口々に「ああ、楽しかった。」と満足した表情を見せてくれました。

記念カンポリンボ祭<午前の部>

そろいの記念Tシャツを着た170名が「サンデー・マラビリオーザ」(素晴らしき町)をポルトガル語で合唱し、記念式典が始まりました。ご来賓の方々から励ましの言葉が、そして長年にわたって日本から図書を送ってくださる方からメッセージをいただきました。児童・生徒代表は、先人への感謝と学校への思い、そして明日に向かっての希望の言葉を述べ、40周年を迎えた学校をみんなでお祝いしました。

記念式典に引き続き記念カンポリンボ祭の幕が開かれました。舞台では、例年にはない40年の歴史を振り返るスライドや劇、初期の移民の人たちの生活を表現したものなど、力のこもった舞台発表が行われました。午前の部の締めくくりは、「全校サンバ」です。今年は、「マシュケナダ」の合唱が加えられ170人が演奏するサンバのリズムは、カンポリンボの丘に広がり、今年もまた大きな感動を残してくれました。



学校を支える力

創立40周年をどのようにするかについては、1年半ほど前から準備を始めました。夢・希望 ブラジル・日本 世界を拓く」をテーマに、子どもたちを中心にすえて、理事会・PTAの皆様方と学校が連携を深め、協力して作り上げる40周年にしていくことを基本としました。記念事業として「記念誌の編集」「社会科副読本の改訂」「記念Tシャツ」「PC教室の整備」などを計画しました。これらの事業の実施にあたっては、サンパウロに拠点を置く数多くの日本企業の皆様方の大きなご支援と共に、理事会・PTAの皆様方からもご協力をいただきました。このことは、学校を支えてくださる皆様方の「学校を大切に、大きく育てていこう」という熱い気持ちの表れでありましょう。私たち日本人学校に従事するものは、この熱い思いにこたえ

る学校づくりを一層推進していくことが大切であると思います。

9月22日は、私たちにとって忘れられない一日になりました。40年という歴史を築いてこられました諸先輩の皆様方に深く敬意を表しますと共に、関係各方面の皆様方に心から感謝いたします。

学校の歴史

昭和42年度(1967年)8月14日 日伯文化普及会日本語講座(小学校講座)として発足

児童数28名

昭和43年度(1968年)シャビエル学園の一部を借用

昭和45年度(1970年)ジャバクアラ校舎に移転
児童・生徒数101名

昭和49年度(1974年)カンポリンボ(現在地)に移転
児童・生徒数359名

昭和56年度(1981年)児童・生徒数は900人を超える。

サンパウロ日本人学校の特徴

・ブラジル現地校やインター校、日本語学校との充実した交流学习

・ビバ・カンポリンボ「特別講師による授業」～体験を重視した学習～

・広い敷地(敷地面積 約122,000平方メートル)とコーヒー園、バナナ園があり自然林に囲まれた環境 等

・児童生徒数171名 (10月1日現在)

・派遣教員15名



シンガポール日本人学校(チャンギ校)の活動報告

シンガポール日本人学校チャンギ校
校長 森田 真

バスターミナルを出発する4台のバスを追いかけ、大勢の子どもたちが手を振りながらターミナルを走っています。

「さようなら~」

「また会おうねえ！」

危ないからと言って止める担任の先生らの手を振り切って、子どもたちは走る、走る。

シンガポールの現地校エライアス校との第5学年交流会のお別れの風景です。

英会話の講師13名との英会話授業の中で、どのように話しかけたらよいか、ゲームの説明をどうしたら相手に分かってもらえるかなど多くの準備をした中での2時間の交流会、自分たちの企画したことをやり遂げた達成感が、どの子どもたちの顔にも表れています。そして、自分の言葉が相手に通じた喜びが、子どもたちの全身に溢れています。

日本人学校小学部では、チャンギ校もクレメンティ校も、週当たり平均4時間の英会話授業、水泳や音楽などのイメージ授業、そしてフォニックスや英文法の授業などを行っています(「気球船」第203号参照)。英語に触れる機会は日本国内と比較しても格段に多くとられていると言えます。家庭学習のおかげもあるのですが、上手な子どもは本当に流暢に英語を操り、またその上達も早いものがあります。しかしながら、このシンガポールは、相当積極的に自らが行動しないと、なかなか日常的に英語に親しめる環境とは言い難いところです。

学校で多くの時間を英語学習に費やしているにもかかわらず、それに比較して、その成果が今一步のようだ、正直その様な声が聞こえてくるのも事実です。

学習した英語を学校生活の中で使う機会をもっともっと増やしていこう、そうした考えのもとに、現地校などの他校との交流や校外体験学習、そして以下にご紹介させていただく「野外活動」などを、それぞれの教育活動の「本来の目的」と共に

「英語を使う場」の提供として、新たな企画をしているところです。

チャンギ校では4年前から、またクレメンティ校では3年前から第5学年を対象に「野外活動」という宿泊行事を行っています。2年前から両校共に、シンガポール教育省の管轄する施設である「アドベンチャーキャンプセンター」を拠点として活動を始めました。ここは、シンガポール全土に同じような施設が5箇所ありますが、現地小学校の第5学年においても約40%の学校が同じような宿泊学習を実施している施設です。

日本でも各都道府県によって導入の規模や程度に差はありますが、このようなアクティビティを備えた施設は、徐々にその数を増やしてきています。「チャンギコーストアドベンチャーキャンプセンター」では、

- ・ジップライン(2階建て建物の屋上からロープに吊り下がっての滑走)
- ・アブストラクト(2階建て建物の屋上から身体を直角にしてロープで降下)
- ・ウォーククライミング(垂直の10メートルの壁を自力で登攀)
- ・丸太渡り(地上10メートルに渡した長さ10メートルの丸太橋を横断)
- ・カヤック(力を合わせて3人乗りカヤックを海で操船)
- ・ドラゴンボートレース(約20人のこぎ手によるドラゴンボートレース)

などのアクティビティが用意されていました。

こうしたアクティビティをインストラクターの指導の下に、パートナーと力をあわせて、パートナーと自分の力を信じながら、恐怖感を克服してチャレンジしていくのが、このセンターのプログラムです。

子どもたちが、自分の力を信じて、それを100パーセント発揮すること、同時に友だちを信じて、お互いに信頼関係を築くこと、これらのことがこの「野外活動」の第一の大きな目的となります。

さて、チャンギ校では、10月3日から5日までの2泊3日の計画で「野外活動」を「チャンギコーストアドベンチャーキャンプ」で行いましたが、ここではシンガポリアンのインストラクターに子どもたちの生活と活動の大半、起床から就寝そして就寝後までをゆだねることになります。4クラス134名の子どもたちを16グループに分けて、それぞれの班に1名のインストラクターが付き添います。

また、各アクティビティ併せて20名、総計36名のインストラクター(20歳前後のシンガポリアンの青年たち)との交流が、この行事の最大のポイントになりました。

日本の義務教育の場で働く教師というのは、ある意味「何でも屋」です。「勉強を教えること」「正しい生活のルールを教えること」「健康や安全について指導すること」「学校行事を企画して実行すること」「クラブ活動や部活動を指導すること」「食事をきちんととらせること」「様々な文書処理を正確に行うこと」などなど・・・。

「何でも屋」を自負する教師は、修学旅行や野外活動、キャンプなどという行事となると傍目にはそこまでと思うほど、目的や方法のひとつひとつ細部に至るまでこだわります。

これは日本の教師に組み込まれたDNAと言っているほどで、全国各地様々な都道府県から集まっている日本人学校の教員の誰もが、やはりそのような「こだわり」を持っています。それは、子どもたち一人一人の成長のために無駄な時間を過ごさせたくないと言う教師の心情の表れと捉えられないこともないと思います。

しかしながら、例えばシンガポールの先生方にはそこまでのこだわりはないようです。「野外活動」2泊3日、インストラクターにお任せして日陰でノンビリ・・・。シンガポリアン先生においては、失礼ながらこのような姿が容易に想像されてしまいます。確かに下見に訪れた際に見かけた現地校の宿泊訓練の様子はそのようなものでした。教師は学習指導に携わる存在であり「野外活動」の指導は施設スタッフとインストラクターが行うべきものと認識をしているのかもしれませんが。

日本人教師はこうはいきません。すべての学校行事において指導の主体は教師です。

「ああしたい、こうしたい、あれはだめ、これはだめ」。正直、1年目の「野外活動」はインストラクターと日本人教師が夜な夜な細部に渡って意見交換をして、なかなか両者が納得せずに調整に四苦八苦する2泊3日でした。

今年度は、そうしたことの反省に立って郷に入れば郷に従え、インストラクターに子どもたちをゆだねて、子どもとインストラクターとの関係作りに焦点を当てよう、その上で日本人教師の一番の仕事は安全に細心の注意を払うこと、そして子どもが達成感を得るために最大のサポートをすること、この姿勢を貫くことにしました。

結果的に、この「野外活動」は究極のイメージョン教育となりました。「英語に浸る」3日間、それも自らの安全を託す指導者のことばに耳をそばだててなくてはいけないのです。

集中して相手の話を聞き、その意味をきちんと把握すること

自分が理解できたか、理解できなかったかはっきりとさせて、意思表示すること

わからないことを「わからない」と言って、わかるまできちんと聞くこと

自分の意志や気持ちを相手にわかるようにはっきりと伝えること

うれしいこと、楽しいこと、悲しいこと、いやなこと、感情を素直に表現すること

子どもたちは「英語を使いながら」こうしたコミュニケーションに大切なことを一生懸命に肌身にしみて学ぶことができたのです。それは、複数の困難なアクティビティを克服したことと同じくらい、いやそれ以上に大きなことだったのではないかと思います。

バスが「キャンプ」に到着した直後から、インストラクターたちの元気のいい声が子どもたちに向かって飛びました。

「JAPANESE SCHOOL! OHHHH ~ I!!!」(インストラクターの掛け声です)

「GROUP ONE! OHHHH ~ I!!!」

「.....! ?」

グループ付きのインストラクターから次々にきびきびとした指示が子どもたちに出され、

その声に促されてしぶしぶと従いながらも、

「何これ? あたしたちに命令してんの?」

と、不快をあらわにしていた子どもたちも、明るくジョークを交えながら、語りかけてくるインストラクターのお兄さん、お姉さんの魅力に次第に引かれていく様子がわかりました。

これが日本ですと、整列して

「気をつけ、礼」

「これから入所式を始めます」

と、いかにも堅苦しいセレモニーからはじまるころですが、何事も最初が肝心、子どもたちとインストラクターの出会いはとても和やかなものだったと思います。

この施設で子どもたちがチャレンジするアクティビティはいずれもなかなかハードなものです。

なにしろヘルメットとハーネスという安全器具、そして1本のロープとその先を握り締めながら地上で見守る友人に命を託して、地上約10メートルの丸太やロープの上を歩くなどというものばかりなのですから。

「怖い~!! できない~!!」

「わ~、面白そう!」

口々に叫んでいた子どもたちも、いざ自分の番になると見る見る表情を変えていきます。真剣なまなざしで一步一步慎重に丸太の柱を登っていく子どもたちの姿を見ていると、そのけなげさに胸がぎゅっと締め付けられます。

半分泣きながら、ようやく決心して90度の壁を降りていく途中、半分ほど降りた所で、上で支えるインストラクターに向かって、まるで「見て! できたよ!」と言うように微笑みの眼差しを向ける男の子。思わず抱きしめたくなるようなかわいらしさです。

2階建ての建物の屋上からロープで地上目指して降りてくるジップライン。

どうしても自分から飛び出せなくて出発口から降りてしまった子ども。インストラクターもあらかじめ扉を閉めた時に、地上から「チキチキバンバン」の大きな歌声が沸き起こります。

「ちゃん! がんばれ~!」

「ちゃんならできるよう~!」

まるでその歌声と声援に押されるように再び出発台に戻り、意を決して飛び出した子どものうれしそうな苦しそうな不思議な表情、巻き起こる下からの歓声…。



子どもたちの就寝時間が過ぎて、セキュリティ役を残しての、夜の宿舎でのミーティングが教師とインストラクター、スタッフの間で行われました。その席でインストラクターから聞く意見は、たいへんうれしいものばかりでした。

「日本人の子どもはかわいい」

「そう! 本当にかわいい。そして、素直」

「日本人学校の子どもはあきらめないでがんばる」

「コーチしていてとても気持ちがいい」

「シンガポールではこうはいかない」

「シンガポールでは子どもが電話して、親が迎えに来ちゃう」

「日本人学校で教えたい」…! ?

最後の意見はともかく、多くはとても好意的なものでした。そしてまた、子どもたちのおかげで毎晩のミーティングも、「明日はここをこうしよう」などという建設的な意見ばかりでたいへんスムーズに進んでいきました。

「OHAYOHGOZAIMA~SU!」

「…! ?」

誤算は2日目の朝に始まりました。インストラクターの口から日本語が飛び出したのです。でも、これは両者が親しみを深めている証拠でもあります。シンガポールが元気な掛け声やダンスを披露すると、子どもたちがすかさずその真似をして、彼らを喜ばせます。アクティビティの合間に、子どもたちのあるグループが運動会で行った「よさこいソーラン」を演じると、インストラクターも踊りだします。他のグループでは、縄跳びの妙技を子どもたちが見せて、その巧みに運動神経抜群のインストラクターも目を見張ります。どうもシンガポールでは、それほど縄跳びはポピュラーではないようです。

英語、日本語、ボディランゲージ…入り混じり始めた中で、各アクティビティに入る前の「安全指導」は、やはり英語でしっかりと行われました。

子どもたち全員を半分に分けて、半数は1日目が6人用のテント、2日目は高床式住居のような30名が一緒に寝られるドミトリイに宿泊します。翌日はそれを交代するというやり方で2泊の野外宿泊を行いました。

「テントで泊まるのは初めてだよ~!」

学校のエントランスホールでテント設営の練習をしてきたとはいえ、海からの風にあおられながら、どうしたらしっかりとテントが張れるかという問題は、なかなか教室での勉強のように簡単に答えが出せるものではありません。しかしながら苦労しながらもしっかりと4本のロープとペグに支えられた立派なテントの前で、誇らしげに子どもたちは胸を張っています。もっとも明け方に巡回していくと、どのテントの中も寝袋はどこへやら、頭がどこか足がどこか分からないくらいの立派な寝相の子どもたちばかり…。

「チャンギコーストアドベンチャーキャンプ」は、国際空港チャンギ空港の間近にあります。風の方角によっては、施設のすぐ真上を離着陸の飛行機が飛んでいきます。夜も午前1時近くまで10分おきくらいに轟音が響き、いったん途切れても4時くらいからそれが再開します。今年は風向が良かったのでしょうか、真上を飛ぶ飛行機の数は昨年に比べて極端に少なく、朝5時過ぎに1機飛んだだけだったので、ほっとしたものです。

決められた時間の教師の巡回とは別に、インストラクターたちは時間を決めて屋外で一晩中不寝番をしていたのがたいへん印象的でした。

「大丈夫ですかねえ」

「みんなおいしいものを毎日食べているからなあ」子どもたちの食事は、ちょっとした問題でした。施設にはキャンティがあって、清潔な調理場があるのですが、出される食べ物はすべてシンガポールの食べ物です。野菜炒めやミーゴレン、魚フライとチキンカレー・・・と由濃い現地料理が毎食のメニューで続きます。好き嫌いの多い子どもたちがきちんとおなかいっぱい食べるだろうか、健康に直結する問題ですので、計画の段階から心配は尽きませんでした。

「ARE YOU HUNGRY？」

「YEEEE ~ I！」

インストラクターの大きな声が食事の始まりのたびごとにかかります。食事前に行われるインストラクターの一連のアクションがすっかり子どもたちの気に入ってしまって、そのせいでしょうか、私たち日本人教師の活動前の心配はうれしいことに杞憂に終わりました。そういうわけで「いただきます」という私たち日本人の習慣に代わって、インストラクターのパフォーマンスを優先することにしました。お代わり続出のメニューもあったりして、太陽の下で目いっぱい身体を動かしているためか、大部分の子どもたちにとってこの食事はおいしく食べられました。シンガポールに長くいるけれど、ミーゴレンをはじめて食べたという子どももいたようでした。



最後の夜、キャンプファイヤーの夜です。ここはやはり「ごだわり」の日本の先生の独壇場です。

「火の神」が従えた「火の子」からいただいた火が夜空のかなた（施設の屋上ですが・・・）から飛んできます。燃え盛るファイヤーの周りで、ファイヤーマスターの教師の呼びかけに応じて、子どもたちは大きな声で歌を歌い、次第に次第にテンションがあがっていきます。そして、いろいろなゲームに興じていくうちに、徐々にシンガポリアンのインストラクターを巻き込んでの大きな輪ができていきました。

キャンプファイヤーの終了後に16本のトーチに分けられた炎を先頭に宿舎に帰っていく子どもたちの列を見ながら、活動を見に来ていたチャンギ校の英会話講師の一人が、

「すばらしいね。本当に良い子どもたちだよ」と、私に向かって語りかけてきました。

3日目、最終日、仕上げのアクティビティ「ドラゴンボートレース」。

「カヤック」や「ドラゴンボート」などの海のアクティビティは、各自しっかりと救命具を付けて行われます。救命具を装着してボートに乗る前に、それがきちんと機能するかどうかを確認します。10名が手をつないで胸まで海に入り、そして浮かびます。救命具だけ浮かんで身体が沈んでしまうことがないかどうか、きつ過ぎないか、ゆる過ぎないか、大切なポイントです。この日は、間が悪いことに潮の関係でしょう、海峡を通過するタンカーから流れ出たのか、たくさんのオイルボール（流失した原油が丸く固まったもの）が海岸近くまで来ていました。多くの子どもたちの水着やシャツだけでなく手足や髪の毛にまで付着してしまいました。私も汚れた衣類を持ち帰り、家で洗濯しても付着したオイルは落ちませんでした。ご家庭の皆様にも何とも申し訳ないことをしたと深く反省をしています。

ただ、子どもたちは転んでもただでは起きませ

ん。次のような作文を書きました。

「水着も身体も真っ黒になってしまった。シンガポールの海は汚れている。でも、海はずっとどこまでも続いているはずだ。地球の環境を守らなければいけないと改めて思った」良い勉強をしてくれたと、子どもたちの理解力の高さに感謝をしています。

白い雲に青い空、その下を真っ直ぐに波を切って進む4艘のあざやかな色彩の「ドラゴンボート」。

子どもたちの掛け声。

インストラクターの励まし。

船端を一齐にたたく櫂の音。

海岸から見ていて、何故か涙が出てくるようなすばらしい光景でした。



大きなかばんを抱えてバスに乗り込む子どもたちとインストラクター、スタッフがハイタッチを繰り返しています。子どもたちではなくてインストラクターの方がカメラを構えて、自分が3日間持ったグループの子どもたちの写真を次々に撮っています。

「さようなら！」

「SEE YOU AGAIN！」

「JAPANESE SCHOOL OHHHH ~ I！」

「また、来るよ~！」

走り出す4台のバスをシンガポリアンの青年たちが追いかけてきます。

「JAPANESE SCHOOL OHHHH ~ I！」

小さく消えていく青年たちの姿を見ながら、バスの中では担任教師の「どうだった、3日間？」との問いかけに、子どもたちが口々に、

「帰りたくない~」

「あと1週間いたい！」

「ずっと住んでいたい！」

「来年も5年生をやりたい！」

「.....!？」

帰校して1週間、20人近い子どもたちが虫刺されの影響で身体に発疹が表われました。施設のドミトリイの一部で虫の駆除や殺虫が十分でなかったと思われます。デング熱の流行もあり蚊には細心の注意をして、蚊帳まで持ち込んでの「野外活動」でしたが、思わぬところで子どもたちに申し訳ないことをしてしまいました。キャンプセンターには嚴重に、二度とこのようなことがないように抗議すると共に、殺菌や駆除の記録を提出するように求めています。

このようなこともありましたが、誤解を恐れずに言えば、今年の「野外活動」は、子どもたちにとって野生に満ちた新鮮な体験、思いもかけない出会いの旅だったと思います。毎日クーラーの効いた部屋で、お母さん手作りのおいしい食事を食べ、柔らかなベッドの上で眠る日常から一步踏み出して、仲間と一緒に歯を食いしばって耐えた3日間は、必ずや貴重な体験として、子どもたちの心と身体の成長に大きな、そして深い足跡を刻んだことでしょう。

「仲良く、楽しく、一生懸命」にがんばった5年生134名。来年は「強く優しい」チャンギ校の最上級生になってくれるであろうことを確信しています。



補習授業校フォーラムに参加して

文部科学省生涯学習政策局社会教育課
地域学習活動推進室長 栗原 祐司

去る10月8日、名古屋国際センターで開催された「第5回補習授業校フォーラム」に参加してきました。同フォーラムは、NPO法人全国海外子女教育国際理解教育研究協議会(全海研)及び財団法人海外子女教育振興財団の主催、文部科学省の後援で、昨年8月に姫路で開催された全海研の全国大会の際に第一回を開催以来、東京、大阪、千葉と回を重ねるごとに充実が図られてきており、一人でも多くの方に補習授業校を知っていただくための絶好の機会となっています。

今回は、今年度からスタートした補習授業校のシニア派遣教員の希望者研修会に引き続いて開催されたため、多くのシニア派遣希望者の方々が参加していました。全海研では、海外子女教育振興財団の支援を受けて補習授業校の巡回指導を実施しており、フォーラムでは、まず8月に実施された北米中南部への巡回指導報告が行われました。2週間で5,800 Kmを走り8校まわるという強行軍で、全海研の金子事務局長をはじめ5人の先生方の熱意を感じました。8校のうちシンシナティ補習授業校以外は派遣教員のいない小さな補習授業校で、中には毎年運営委員が代わるため資料等の引継ぎが不十分であったり、職員会議や校内研修が行われていない、あるいは複式学級の指導方法がわからない、日本の情報が少ないなどの様々な課題を抱えている実情が紹介され、指導力の向上もさることながら、学校運営、経営を含めた組織的、継続的な支援の充実の必要性が強調されました。

また、休憩をはさんでシンポジウムが行われましたが、実は今回巡回指導に行かれた先生方のうち3人は日本人学校派遣の経験はあるものの補習授業校を見学するのは初めてで、「初めての補習校体験」というテーマで感想を含めた意見発表と参加者全員との意見交換が行われ、盛会のうちに終わりました。印象的であったのは、「補習授業校の叫びを日本に伝える必要がある」という言葉で、全海研の生野会長が「日本からも補習授業

校を見ているということ伝えたい」という発言とあわせて、今後さらに日本国内における補習授業校の知名度を高める努力をし、さらなる支援の手を差し伸べる必要性を実感しました。なお、私からは、いつものことながら補習授業校に通う子どもたちの心のケアの重要性と、現地の日本人・日系人の歴史等に関する学習の重要性、そして国・地域によって異なる対日感情等を踏まえた交流の課題について発言させていただきました。

「補習授業校フォーラム」は、次回は1月に東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで、第7回は5月上旬に福岡で、第8回は全国大会とあわせて開催される予定で、さらに多くの関係者の参加を期待したいと思います。

さて、シニア派遣については、昨年度末の研修会の場で、派遣予定者の方々に大変僣越ながら、三つの留意事項を申し上げさせていただきました。すなわち、今回派遣予定の先生方は、日本国内は当然ながら再派遣のベテランの方々ばかりだが、国・地域事情や日本人社会の規模、財政状況等によつての千差万別なのが補習授業校。過去の成功経験をそのまま繰り返そうとすると失敗することもあるので、新たな気持ちで望んでほしい。シニア派遣を迎える現地の方では、ベテランの派遣を歓迎する一方で、現役バリバリの先生の派遣を期待していたのに大丈夫かと不安を抱えて身構えていることも事実。新しい制度なので、第一期の先生方は今後の制度の定着に向けた試金石になるということ認識の上、現地に溶け込む努力をしてほしい。複数派遣の補習授業校においては、これまでどおり管理職経験のない教諭が教頭として勤務している。以前に比べて実力・年齢差が広がっており、不十分に感じることもあるかもしれないが、彼らが将来の補習授業校長として再派遣される可能性が十分あるので、未来の補習授業校の指導者を育てるつもりで指導してほしい。それから、自ら志願しているので体力・気力ともに充実している方ばかりで問題はないだろうと思ったので申し上げなかったものの、もう若くはないので健康面にはくれぐれも気をつけてほしいということも気になっていました。

第一期シニア派遣の先生方が飛び立ってから半年以上が経過し、元気でやっているだろうかと思っていたところ、今般、全海研から国際理解教育ブックレットとして『シニア、世界を駆ける』(創友社刊)が出版され、いずれの校長先生も各地で様々な課題に直面しながらも、過去の経験を生か

して非常に意欲的ががんばられている様子を知ることができ、大変頼もしく感じました。また、大変失礼ながら、日本人学校派遣経験はあるものの今回が初めての補習授業校派遣という校長先生は、うまくやっているだろうかと思っていましたが、まったくの杞憂であったようです。シニア派遣の先生方どうしが密接に連絡を取り合っている様子もよくわかりました。一人派遣であっても情報交換しながら問題解決に当たられていることは重要なことです。ぜひ、シニア以外の派遣教員の先生方とも連絡を取り合っ、みんなで協力しながら補習授業校を盛り立てていってほしいと思っています。このブックレットは、将来シニア派遣を目指される方だけでなく、海外子女教育に携わる関係者にも幅広く読んでほしいと思います。シニア派遣教員も含め、日本人学校・補習授業校関係者が大いなる熱意をもって取り組むことによって、海外子女教育の充実が図られていくことになると思います。皆様方のますますの御活躍を期待したいと思います。



平成 20 (2008) 年度日本人学校等専任教員採用支援プログラムについて

海外子女教育振興財団 事業部助成チーム
田嶋 宏光

海外子女教育振興財団では、政府派遣教員とは異なり、各学校を設置・運営する「学校運営委員会(理事会等)」が採用する教員(現地採用教員)のうち、特に財団を通して日本国内から招聘する専任教員(赴任は2008年4月から)の採用支援プログラムを実施いたします。

つきましては、本プログラム実施にあたって、先般財団より運営委員長・学校長宛9月10日に送信いたしましたメールにて添付されたご案内にある条件をご確認のうえ、参加を希望される学校は、恐れ入りますが11月30日(金)までに参加希望の旨と暫定採用予定人数(見込み数)について、財団までお知らせください。

事務連絡

平成19年度派遣教員等の帰国について

教職員給与係 増田 雄護

平成20年3月で任期満了により帰国予定の在外教育施設派遣教員及び国際交流ディレクターの帰国手続について、国際教育課長名で通知しました(平成19年10月22日付け19初国教第116号)。

概要は次のとおりです。

1. 帰国許可願の提出について

校長(一部の補習授業校にあっては教頭又は教諭)は、帰国教員等の「帰国許可願」を取りまとめ、「平成20年3月帰国予定者一覧表」とともに在外公館を通じ、平成19年12月7日原本必着にて文部科学大臣あて提出すること(原本送付の前に国際教育課宛に、必ずFAXにて提出すること)。

日本人学校及び補習授業校の管理職については、本年度も校務引き継ぎを現地で実施することを予定しているため、引き継ぎの期間を考慮し帰国日程を計画すること。

現地出発日は、平成20年3月17日以降で在外教育施設における教育等に支障が生じるおそれがない日とすること。これによることのできない特別の事情がある場合は、文部科学省と別途協議すること。

帰国日程は通常の経路(直行帰国)とすること(直行便がない場合等は途中経由して差し支えないが、経由地での滞在は認められない)。

帰国教員等及びその扶養親族の本邦到着地は、原則として成田国際空港とすること。

帰国許可後の日程変更は原則としてできないので、帰国許可願の提出に当たってはフライト等十分検討の上提出すること。

2. 帰国旅費の支給について

帰国旅費のうち航空賃は、あらかじめ文部科学省が指定する本邦の旅行代理店を通じ、現地航空会社支店で航空券の発券を手配する方法(PTA方式=航空賃元払い方式)で支給することとしているので、帰国教員等は発券手配が出来次第航空券を受領すること。

航空賃以外の旅費は、事前に在勤基本手当等受取銀行口座に送金する(3月上旬予定)。

なお、旅券の失効及び事務手続きが必要となるので、帰国教員等は、本邦到着後速やかに指定場所に出頭し、本人及び扶養親族の「公用旅券」、「本邦到着届」、「PASSENGER RECEIPT」、「BOARDING PASS (使用済航空券半券)」を提出すること。

3. 在勤手当について

平成20年3月分の在勤手当は、出発日までに本人が受領できるよう3月上旬に在勤基本手当等受取銀行口座に送金する。

会計事務手續上必要となることがあるので、在勤基本手当等受取銀行口座は開設したままで帰国すること。

4. その他詳細については、平成19年10月22日付け教職員給与係事務連絡によること。



国際教育課「気球船」編集部

本誌へのご意見、ご感想をお待ちしています。下記までご連絡ください。

連絡先 : E-mail:kokukyo@mext.go.jp

こちらも随時募集中です。

投稿記事

(原稿料は出ません。ご了承ください。)

新規配信依頼

編集後記

日本では秋が深まってきました。栗、芋、かぼちゃ、きのこ、サンマ・・・食べ物がおいしい季節となりました。

食べ物に浮かれている間に、あっという間に冬がきて年末を迎えそうな気がします。

今年も残り2ヶ月。今年の年始にたてた目標は

達成できているでしょうか？ 年始の誓いを思い出し、ラストスパートしたいと思います。(A.U)

～ 10月号の内容 ～

世界の窓 _____1

夢広がるカンポリンポの丘

～ 創立40周年を迎えて～ -----1

サンパウロ日本人学校校長 志佐 光正

トピック _____3

シンガポール日本人学校(チャンギ校)の活動報告 -----3

シンガポール日本人学校
チャンギ校校長 森田 真

補習授業校フォーラムに参加して -----8

文部科学省生涯学習政策局社会教育課
地域学習活動推進室長 栗原 祐司

平成20(2008)年度日本人学校等専任教員採用支援プログラムについて -----9

海外子女教育振興財団 田嶋 宏光

事務連絡 _____9

平成19年度派遣教員等の帰国について -----9

教職員給与係 増田 雄護